仰止はんのう

第13号

むかしは筏船で賑わったという人間川を一眼下にした静寂な神域。
飯能の町の大の中心でもあった諏訪八幡神社の境内に
歳月の重さと、端正な美しさを感じさせる　丹生明神社がたっている。
そのたたずまいは、小さいながら心にしみこむ懐しさがある。

丹生明神社　飯能市山手町

飯能の中世 城館跡

山影康洋

飯能市内には現在、ざっと調べてみただけで三十ヵ所近い中世の城館跡が確認できる。と言うと、ほとんどの人は「飯能にお城なんかあったろうか?」と思うだろう。だが、鎌倉時代以降、江戸時代に入るまで市内には数多くの土豪が存在し、居住と防衛のために城や館を築いていたのである。このことは江戸後期の「新編武蔵風土記」（以下「新記」と略称）戦時中の「飯能郷土史」（同「飯史」）にも多く記されているが、失礼ながら城郭に対する知識が無かったため伝説を鵜呑みにした例が多く、正しい考証がなされていない。だが、最近県の一斉調査による「埼玉の城館跡」（同城館）が編纂され、多数の城館の跡が発見された。その中には伝説だけのもの、すでに消滅したもの、存在さえも知られていないものも多く含まれている。

市内も例外ではなく、僅かな痕跡のみ残るもの、完全に消滅したものが多くある。ではあるが、中世の遺物の少ない現在、土塁や空堀ばかりの小さな城館跡といえど、実に貴重な存在なのである。

今回、私は資料と伝説をもとに実地で調査し、そのいくつかを紹介して、私なりの考証を加えてみた。これによって少しでも多くの人々が城館跡というものを理解し、保存・研究をして頂くことを望んでいる。なお、今回は紙面や所要時間の都合上、集中して遺跡の残る精明地区四ヵ所と、戦国期の特色を色濃く残す原市場、大河原の両りゅうがい山城を取り上げた。

一、精明地区の館跡

中居　加治氏館　加治氏館は現在曹洞宗宝蔵寺の寺域となっており、同寺開基加治豊後守（新左衛門尉）貞継の居館であったと伝えられ、加治屋敷と称される。貞継の足跡は一切不明で、同寺所蔵の位牌によって応永三年（一三九六）八月一日、六十二歳で没したことのみが伝えられている。

「新記」中居村宝蔵寺の条には、館跡について次のように記されている。

「…寺ノ山腹ニ加治氏ノ屋跡アリ。一区ノ平地十五六歩ソノ西北、東ニ曲リテ深サ五六尺ノ堀切アリ。又屋地ノ後山ニ五輪ノ石塔アリ、加治新左衛門ノ墓ナリト云。…」

現在、寺墓地の奥には「新記」の通り、西北隅に空堀が20㍍ほど残っていて、東へ廻っていた跡がある。遺構はこれだけで、すでに江戸後期には大方破壊されていたようである。寺門前の言後久雄氏などのお話によると、〝空堀は競馬のスタート地点として馬を入れた跡だ〟と伝えられていたらしい。だが、これは信じ難く、僅かしか残っていないのでそう誤解されたのであろう。やはり、前面の低湿地（水田）を自然の要害として、寺後方を囲むように空堀を廻らしていた残欠と考えた方がよさそうである。また北側、東へ延びていたという堀は全くの平坦地となっているのだが、これは江戸期の破壊だけではなさそうだ。というのは明治十六年（一八八三）、明治天皇は天覧山行幸の際に中居へ馬を進め、寺の北東にも立ち寄ったので、後に記念碑を建てた（地元では第二天覧山と呼ぶ）。この時に堀跡を通路として埋めてしまったらしいかだ。また東側は、開墾の際に破

宝蔵寺

壊されたものと考えられる。当然のことながら、建物はこの堀の内側にあったはずである。ところが館は山上にあったと伝えられ、ある本では山の奥に堀切（ほりきり）（侵入を防ぐため地続きを空堀で分断したもの）がある、としている。

宝蔵寺裏　加治氏館の空堀

だが、実際は堀切は全く確認できず、山上は平坦な地形が続くだけで、手を加えた形跡が見られない。そこで「新記」を見直すと、庵跡は寺後の山腹、五輪塔（現在、寺有墓地に移されている）は庵地の後山となっているので、やはり堀跡の内側、竹籔を含む寺域が館跡で本堂あたりに建物などがあったのであろう。そして山上には館ではなく、遠見の櫓などが置かれていたのではないだろうか。遺構が少ないので素人の私には判断しかねるが、館の規模は東西約90㍍、南北約140㍍ほどであったのではないだろうか。

なお、大字青木の青木安雄氏によれば、原町心応寺所蔵、市内最古の嘉禎四年（一二三八）の板碑は宝蔵寺東側の畑から出土したもので、当時、寺を兼務していた心応寺住職が預ったものだという。だが、現在は心応寺の開基僧の墓石ということになってしまっている。

青木氏は発掘した本人から聞いたというから事実であろう。

それはともかく、その板碑は中居周辺が鎌倉初期にはかなり開発が進んでいたという重要な資料となるものである。

青木堀の内（伝大石重仲館）　ここは宝蔵寺の南東200㍍ほどの至近距離にあり、関東管領上杉家の配下、武蔵守護代家の一人、大石駿河守重仲の館という。

地形は中居清泰寺入口あたりから張り出す、青木の水田まで延びる小台地に占地していて、麓には水路が廻っている。比高は10㍍にも満たないが眺望もよく、三方を低湿地に囲まれ、館を構えるには適当な地といえる。

だが、堀の内在住の青木安雄氏他の方々に聞いてみたのだが、大石氏どころか館跡の伝承もないという。唯一、台地西北の高所、茅葺の納屋が建つあたりは昔、馬場があり、ある武士がそこへ馬をつないで宝蔵寺へ通った、という話が残されているが、それが大石重仲かどうかも分からない。これでは遺構も期待できないと思ったが、青木氏の案内で周辺を見回ることにした。

そして、伝馬場跡の東（青木第二公民館のところ）に戦前まで旧新井家（今は畑と宅地）があり、今も大きな井戸が残る。その北端、道路際に僅かな土塁状の高まりを見つけた。以前はこの土塁状のものは東西へ延びていてかなり大きなものだったらしいが（東へ下るほど跡が残る）、耕作と道路工事のためにほとんど削り取ってしまったという。さらに土塁状の下は2㍍余りも落ち込んでいて道路となっているので、ここが堀切であった可能性がある。また、台地前方の水路は先端を廻って南へ転じているが、この一部が堀であったとも考えられる。全体で南北約130㍍、東西約100㍍位の規模だったのではないだろうか。

さて、館主が本当に大石重仲であったかどうか、甚だ疑問である。なぜなら文献資料に記載がなく、前述の通り守護代ほどの人物が、全く伝承にも残らないのはおかしい。また、館のつくりもいささか粗末に思える。

だが、中居宝蔵寺には

「中興檀那駿州大守心溪安公禅定門神儀　時享徳乙亥源朝臣大石重仲齢四十七正月廿五日逝去畢」

とある古位牌が所蔵されており、寺と重仲が何らかのつながりがあって再興されたことは分かる。

しかし、大石氏は支族も多く、十五世紀には、所領も旧多摩郡から入間郡の広い範囲に及んでいたことが知られるが、この頃高麗郡内まで支配していたかどうか……。

市内白子、長念寺の所蔵する大石定久が発給した文書は天文十二年（一五四三）のもので、重仲が没した享徳四年（一四五五、康正元年）から約九十年の隔たりがあって直接の大石氏支配の証拠とはならない。仮に支配していたとしても直接の経営は、土豪が行っていたはずであるし、加治氏一族の氏寺たる宝蔵寺をなぜ守護代が再興したのか、大石氏が手を下すほど寺勢力が強かったとも思われない。

さらに、いくら氏族が多かったにせよ、加治氏の本領に重仲が入ってきて、この地に居住しなければならないのか、不可解な問題点は尽きない。

いずれにしろ、大石重仲居館説はおぼつかない、といわざるをえない。

青木泉ヶ城　泉ヶ城は青木堀の内と水田をはさんで南に位置する土豪青木氏の館である。

「新記」には詳細な説明が載せられ、江戸後期の様子が知られる。すなわち、

「村民内蔵助ガ先祖式部大輔実近ガ居住セシ所ナリト云。其地ハ内蔵助ガ住地ヨリ西隣弥惣次ガ住地ヘカケテ凡東西二町南北一町半許ノ所ナリ。平坦ノ地形ニテ土手ノ形チ今尚存セリ。総構ハ皆切崩シテ畠トナレバ方量ハ今ヨリ弁ジ難シ。」

とある。

なお、遺構は文中の弥惣次の家にあたる青木和正氏宅に残るが、内蔵助（くらのすけ）（直堅）も弥惣次も共に和正氏の先祖といい、何らかの理由で今の青木八郎氏宅へ内蔵助が、和正氏宅へ弥惣次がそれぞれ分かれて住んでいたのだろう。

館の占地状態は北側の低湿地を要害とし（現在の水路が元の水堀であろう）残る三方に堀と

土塁を廻らすものであった。現在、空堀は竹籔の中に深さ1㍍以下で残存しており、和正氏宅を囲むように廻っている。西側には高さ1.5㍍位の土塁はよく残り、もとは相当大きなものであったらしい。

また、東へ130㍍ほどの青木勇吉氏宅の裏にも土塁が残る（未確認）といい、「新記」所載のように広範囲に人工の防備が施されていたようだ。さらに、南方ほど高まっているので見下ろされないよう、台地上も防備されていたはずだが、今は畑と宅地で何も痕跡は見られない。

さて、ここを築いたという式部大輔実近（実基）という人物は治暦三年（一〇六七）に没したと「青木系図」にあるらしいが、実在したかどうか、かなり疑わしい。というのは、「青木系図」は子孫たる和正氏が指摘されるように、後の創作が多いらしく、「飯史」に載る加治氏の祖、太郎実家の従兄弟、青木丹五郎実直が初祖とみられるからである。実直は他の加治一族と同じく鎌倉期の武士であり、十一世紀に生存したとされる実近とは著しく年代が隔る。

また、系図の式部大輔、隼人正など、官名を地方の武士が僭称するのは早くて南北朝期、明らかに創作である。

なお、系図では朝鮮半島の帰化人、または、それに関係した人物を祖とするが、実直が丹五郎と称し、末孫が加治姓も名乗っていることからしても丹党加治一族であったことは間違いないだろう。現在の遺構も戦国期のものだから、実直以降、序々に整備されていったものと推測できる。

いずれにしろ「青木系図」は江戸期にはやった〝出自〟を誇るために、いわゆる系図屋に作らせたものとみられる。恐らく青木家は江戸期に名主を勤め、苗字帯刀を許されるほどの家柄だったから、周辺の加治氏未裔を称する家と同族では立場上良くないと考え、あえて出自を偽ったものであろう。

もっとも、これが宝永年間（一七〇四～一七一〇）といわれる宝蔵寺騒動（共に中居宝蔵寺檀家だった青木家一門と加治家末裔一門が、宝蔵寺開基が青木実近か加治貞継かで争い、青木家が敗れて、成木安楽寺へ転檀してしまった事件）の原因となるとは、創作者も夢にも思わなかったであろう。

泉ヶ城 土塁（青木和正家）

下加治館　ここは「城館」に実測図が載せられているので分かりやすいが、文献は皆無で一切は不明である。

現在、館跡に居住されている土屋栄一郎氏は甲斐武田氏の臣土屋一族の後裔といい、江戸時代には代々名主を務めた名家である。幸いにも嘉永元年（一八四八）、時の当主八郎左衛門が描いた館址絵図があり（写し）当時からほとんど変化がなく、昔からの状態を保っているのが分かる。館址南方の台地はかなり高くて、見下ろされてしまうが、間の低湿地は幅50㍍を越え東西も湿地続きで水田となっている。

昔は台地を廻って水堀があったといい、土屋家背後の空堀と共に全体を囲んでいたようである。空堀は幅1㍍で残り、一部に水が溜まっているが、東西200㍍にも及ぶ。土塁がこれに添い、一部幅5㍍に及ぶ所もあるが、高さは1㍍足らずで全体的にほとんど崩壊状態である。北西隅に土塁の切れ目状のものがあるが、これは当時の虎口（出入口）の跡と思われ、土屋氏が子どもの頃には通用口に利用していたという。虎口前の堀には、かつて土橋（掘り残した畦状の通路）があったのではないかと思うのだが、埋まっていて全く分からない。当初は土塁幅の大きさから見ても、相当の土木工事がなされていたようだ。

下加治館 空堀（土屋栄一郎家）

さて、誰がこの館を築いたのか。伝承では加治貞継が下屋敷として構えたのだといい、下加治の地名もこれによったのだとされる。真偽のほどはともかく加治氏の館であったことは間違いあるまい。そして、後北条氏滅亡後に武田旧臣の土屋家が当地に土着し、村の開発に当たったのではないだろうか。

土屋家初代とみられる権兵衛は、慶長四年（一五九九）に没しているから、土着時はまだ館は機能していただろう。

また、天正元年（一五七三）没、妙善禅定尼という者も伝えられているから、土屋家は当時この地にいた縁者を頼ったのだとも考えられよう。そして、帰農するに及んで館の必要性がなくなり、次第に破壊されていったのだろう。

原市場・大河原の「りゅうがい山」　市内には「りゅうがい山」と呼ばれる山が三ヵ所ある。この地名は「要害」の転訛といわれ、城郭そのものを指すといわれる。

事実、原市場字東沢、大河原、坂石町分のそれには、戦国期の城郭が存在する。ここでは歴然と遺構を残す原市場（便宜上Aとする）、大河原（同B）の二つを挙げ、混乱を避けるために表（次頁）にした上で、説明をつけ加えたいと思う。なお「城館」ではAを「新記」の秩父郡南村条のりゅうがい城に比定するが、所存地も山麓に残る「中屋敷」の位置も全く違っているので混同したものであろう。

さて、立地の面ではA・B共

◍表でみる両りゅうがい山城の様子。

	A　原市場	B　大河原
築城期	戦国後期	戦国初期のものを改修？
築城者・城主	後北条氏が指導 土豪が守備	土豪大河原氏 〃
形態	複郭（本丸、二の丸等）計画的に一斉に築城・山上のみ	単郭（基本的に本丸のみ）殿屋敷の詰め城を改造・山麓に二ヵ所出城あり
特色	堀切の他堅堀を多用、坂虎口や櫓台を少し張り出して造るなど進歩がみられる	背後西側の大堀切の他に四方に堀切、小腰曲輪を設ける　虎口も単純で全体的に古い造り
役割	天神、妻沢峠の監視 山王峠方面の連絡	青梅勝沼領方面への連絡
文献	なし、一部混同するものあり	「新記」殿屋敷の所在のみ
伝承その他	三十人で守備、水汲み権八伝説　山麓に長者屋敷（古銭が出土） 妻沢集落が管理、他	大河原四郎が居住 鎮守に軍荼利神社を勧請 他

に尾根が独立状に盛り上がった急峻な山頂にあり、（Aは標高320㍍、Bは246㍍）どこから登っても実に苦労する。合戦時には攻めにくく、少数で守ることができる。Bからの眺めは素晴らしく、県東方の平野部まで見渡せるほどで、見張りの城には最適の場所。

　また、Aは今は植林のため眺望がきかないが、名栗方面の監視や連絡は容易であったろう。

　このように両城は立地の面では共通するが、遺構はかなり異っており、Aには同じ戦国期でも進歩がみられる。すなわち、Bは土豪大河原氏の非常時の詰め城を改修して使用したと思われるのに対し、Aは初めから築城家が指揮して、一気に造り上げたものとみられる。

　Aは連郭式といって西から二の丸、本丸、腰曲輪（便宜上名称をつけたが戦国期にはこのような名称はない）を一列に並べその間に幅8㍍、深さ3㍍ほどの堀切を設け、まわりには小腰曲輪と堅堀（たてに堀った堀、山肌を移動されるのを防ぐ）を配する。また、出入口は山の東妻沢と赤沢の登り道が合流した尾根上にあり、堀切を越えた急な所に坂虎口（出入口をせばめて多数の出入りを拒み、上から攻撃しやすいよう坂道にしたもの）を設け、道を曲げて腰曲輪を張り出して攻撃しやすくしている。また、本丸堀切には櫓台がわずかに張り出していて、堀切に入った敵を狙い撃ちできるようにするなど、手慣れた築城者の工夫がよく観察できる。

　これに対しBは前述の通り、立て籠るために山上を平坦にした程度の初期の山城に、四方に堀切を設け、南尾根上に小腰曲輪を配しただけと思われる簡単なもので、虎口もさほど手を入れた様子がない。なお、腰曲輪に大きな穴が数ヵ所と石積みがあるがこれは当時のものではなく、恐らく第二次大戦中に対空戦略に何か設備をした跡であろう。

岩根橋よりりゅうがい山を見る（右手の山）

　ところで役割の面では、A・B共に名栗方面の峠道の監視と青梅方面への連絡のためだろうことは解かるが、Aがあまりにも原市場谷津から離れているのが不可解だ。街道から離れていては城がある意味がない。

　そこでAについて赤沢の浅見茂氏にお聞きしてみたら、忽ちその謎が解けた。というのは、昔は名栗からの街道は天神峠を越えて妻沢集落をぬけ、土屋医院前で現在の道と合流する方法をとっていたらしいからだ。その証拠に慶応二年（一八六六）名栗谷を出た武州一揆勢の主力はこの道を通って飯能へと乱入していった事実がある。つまり昔は赤沢へ遠廻りするより峠道を進んだ方が速かったのである。道幅などはどこも変わる訳ではなし、健脚であった昔の人々にはさして苦にもならなかったのだろう。

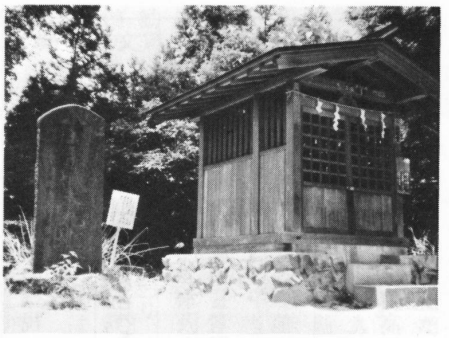
　また、気付いた点や変わった伝承も特にAに多くみられるが紙面の都合上割愛する。この他については別表を参照していただければ幸いである。

＊　＊　＊

　この調査については、各地区の皆様方の大変あたたかいご協力を得ました。心よりお礼を申し上げます。

歴史散歩　八王子城と飯能武人

青木晃平



北条氏の配下となり氏照の重臣として家範が任えた。家範は高麗流八条馬術を継承する名手で、禅道に通じ不動の信念に生き、八王子城と運命をともにした。

氏照の滝山城から八王子城への移転については、かつて信玄に攻められ、二の丸まで落ちて落城寸前まで戦ったことがあり、信玄に対しての甲州口を守るための築城であろう。なお、滝は落ちることから滝山はきらわれたとも言われる。移転の時期は天正十年十月から天正十六年正月までであろうとされるが確かではない。

▒八王子城攻撃

すでにひと月前に寄居の鉢形城が落城して八王子城へ攻撃が始められた。六月二十三日の未明、朝もやをついて開始され、攻撃軍は山下曲輪で近藤実助、金子家重らを討ち取って戦を有利に展開したが、中盤戦で中の丸の中山家範の抵抗にあう。本丸の横地監物もこれを助けたので、前田利家の馬廻りも三十人あまり討死した。中の丸で前田勢が苦戦している間に、恩方滝の沢道より直接三の丸を攻めた上杉勢により、狩野一庵が討死し、攻撃軍が有利となり、御主殿千畳敷にいた多くの婦女子が包囲され御主殿の滝に飛び込んで死んだ。重臣の横地監物は三百人におよぶ戦死者の中を脱出したが、二～三日後に一揆のものに首をはねられた。横地には何か特別の任務があったのかも知れない。

いけどりにされた婦女子は籠城中の城兵に示され、中山家範、狩野一庵の首は籠城中の子どもたちに送られた。これによって城内の戦意が喪失したと伝えられる。この時氏照は城内にいた。

小田原攻めは秀吉二万の兵力、八王子攻めは前田利家、上杉景勝合せて一万五千の兵力といわれる。各地を攻略した征東軍は、やがて小田原の攻囲に結集したから支えきれず、ついに天正十八年七月九日落城した。北条氏政、氏照は切腹を命ぜられ、氏邦は前田利家に預けられた。

天正十八年七月十一日、侍医田村安清の屋敷で氏政（五十三才）氏照（四十九才）で切腹した。氏照の法名を「青霄院透岳宗関」という。小田原伝心院に埋葬、のち宗関寺に墓所が出来た。竹林の中にさみしく眠っている。その横に中山家範、孫の信治の墓がある。現在の宗関寺は別の所にあり、北条氏照百回忌の法要が水戸藩の家老職であった中山信治の呼びかけで盛大に挙行され、この時寄進された梵鐘が現宗関寺にある。家範の館跡に住んでいる人は勘解由（かげゆ）稲荷をおまつりしているという。

▒北条氏守り本尊と落合村

市内落合に薬師堂があり、瑠璃殿と称し西光寺の仏堂で本尊薬師如来を奉安して、落合の薬師様として信仰されている。

寺伝によると北条早雲（伊勢新九郎氏長）が守り本尊とし、氏綱―氏康―氏政―氏照と受け継がれ、一族の守り本尊として

▒後北条氏の武蔵支配

堀越公方を滅ぼして伊豆の韮山城にあった、伊勢新九郎氏長（早雲）は相模を侵略して手中に納め、武蔵にその手をのばし、氏康の代になり天文二〇年（一五五一）平井城を攻略し、翌年山内憲政の越後敗走後、武蔵の大半を手中に収めたが、武蔵はまだ不安定であった。

その頃、岩付城の大田資正、忍城の成田長泰が手を結び、越後の山内憲政と長尾景虎（謙信）が手を結び氏康に反抗しようとしていた。

永禄三年（一五六〇）今川義元が桶狭間で戦死、長尾景虎（謙信）が天正六年三月十三日四十九才で死ぬまでに関東に十四回出陣したが、武田信玄が近くにいるため、常陸の佐竹氏、安房の里見氏、武蔵の大田氏と遠交を結んだ景虎は、輝虎と改名したが越後の内乱のため、越・相の和議成立をする。この頃信玄の小田原、江戸攻撃がはげしくなる。氏康は死に際し氏政に、「信玄と和し、景虎と絶つ」と遺言したという。相・駿・甲の和の方が重要と見たのであろう。この間に氏康は江戸城を遠山直景の・綱景に滝山城を氏照に、鉢形城を氏邦に、小机城を氏堯に在城させて、武蔵の支配体制をかためていった。

▒北条氏照と中山家範

飯能武人中山家勝は川越夜戦に上杉氏に任えていたが、北条氏康の二男氏照が大石氏との養子縁組となり、滝山城を居抜きでゆずり受けたため、中山氏も

武蔵野鉄道開通と一丁目の発展

〝大正～昭和初期の飯能駅前〟

武蔵野鉄道開通（大正４年）

加藤義雄

尊崇されて来たという。

秀吉が天正十八年（一五九〇）小田原城を大軍で囲み攻撃したとき、北条方の落武者大久保某が逃れ来て落合村と称し、城中より背負って来た薬師尊像を奉安したといわれる。

家康と中山氏

天正十八年（一五九〇）家康が関東へ入国したときはまだ秀吉に臣従する一大名で、やがて関東へ配置替えになった。新たに領主がかわったら必ず一揆が発生するであろう、と。この時期を、柔と剛の両側面をもって乗りきった。

柔とは、後北条氏遺臣の家臣団への登用とか、在地有力者の村役人化であり、剛とは検地の施行がその一つにあげられる。

中山家範八王子城に討死後、その子信吉、照守が家康の命により、徳川家に任え、信吉は水戸藩の付家老までなった。家康はこのように柔の実行により徳川三百年の歴史のもとをつくった。

現在の一丁目は二丁目、三丁目に比べ比較にならぬほどの広大な面積を有し、且戸数も多く賑やかでありますが、何故そのようになったのでしょうか。

結論から申し上げますと、それは大正四年に武蔵野鉄道（現在の西武鉄道）が開通し、一丁目の東部に駅が出来たからであります。そして、駅前の繁栄が一丁目の発展を促がしたのであります。以下この間の事情について述べさせていただきます。

まず最初に一丁目の生い立ち、並びに一丁目の名称について申し上げます。一丁目の成立は、古くは縄市の発生と関係がございます。江戸時代、宝永の頃から現在の大通り商店街、詳しくは今の三丁目の中央公民館から広小路までの通りに市が立つようになりました。所謂、縄市と呼ばれるもので、毎月六と十の日に市が開かれました。通りをはさんで北が飯能村、南が久下分村でありましたが、この行政区分とは関係なく、中央公民館前から広小路までを三等分致しまして、中央公民館側を上宿又は上町と呼び、広小路側を下宿又は下町、中央部を中宿又は中町と呼びまして、明和、安永の頃は上町と中下町で交互に市が開かれました。

大通り商店街（明治末期）

ところで、明治十五年五月、飯能村久下分村真能寺村の三ヵ村が合併して飯能町となりましたが、その頃から上町は〝通り二丁目〟、中町は〝通り一丁目〟、下町は〝通り一丁目〟と呼ばれ、それぞれ三丁目、二丁目、一丁目となったのでございます。

因みに、一丁目の山車小屋の二階には古い木製の大きな箱が沢山ありますが、その蓋の裏に墨で大きく下町と書いてありました。一丁目が昔は下町であったことが、このことでよく分かります。

このようにして一丁目の名称が出来たのでありますが、一丁目の範囲は前述のごとく明治中期までは、吉田屋呉服店あたりから広小路の奈良さんあたりまでありまして、その広さは二三丁目とほとんど同じであったわけでございます。

この間の事情は飯能郷土館所蔵の「明治十五～十七年頃の飯能町並略図」並びに「明治三十五年の町並略図」に明らかであります。

ところで、大正四年、武蔵野鉄道が開通致します。開通当初の駅前はどうであったでしょうか。それより以前、明治三十二年に入間鉄道馬車が開通し、そ

の発着所が銀座通りの出口、現在の飯能薬局前に設けられましたので、銀座通り（当時は出口通りといった）には西から東へと次第に家が建ち並び、町並らしきものが出来て参りました。しかし、飯能駅前の状況はただ駅が出来たというだけで、その周辺は畑、空地であったのであります。飯能市図書館所蔵の新井保氏作の「大正四年頃の飯能町市街地略図」を見ますと、当時の飯能駅前には港屋支店と運送屋があるだけで、現在の第一勧業銀行から武居ビル前を通り、消防署方面へ通ずる道路は記載されておりません。まだ道路はなかったのかも知れませんし、仮にあったとしても人家はなかったわけであります。原町の小室病院の先々代の院長小室太一先生が書かれた「記憶をたどりて」（大正時代の飯能のことが書かれている）には今の丸広前のコーヒー苑から松音屋菓子屋へ通ずる道は細い道で畠に接し、消防署当りは土地が低く、何時も下水が氾濫していて不潔極まる様相を呈し、町田屋魚屋西の細い路地を抜けると、直ぐ畠で、大きな肥溜などがあり、稲荷の森がうら淋しく見えるばかりと記載されております。

要するに大正四年武蔵野線開通当時は、ただ駅が畠の中にぽつんと出来たというだけで駅前はほとんど空地であったのであります。

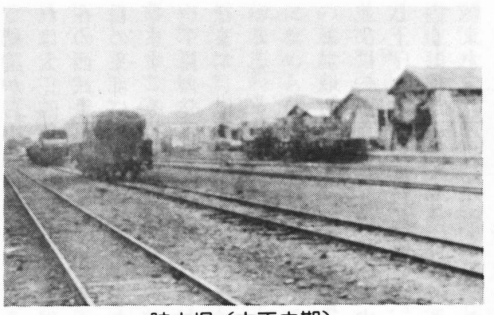
ところが、それからわずか十年間で一変致します。そして、更にそれから十年後の昭和十年頃には飯能駅前はお店がびっしりと立ち並び、遂には駅南にも家が出来、工場も建って川寺境まで一丁目が拡がり発展するのであります。

飯能駅が出来て一番変ったことは駅前に材木屋が先を競って進出したことであります。

次に、飲食店、菓子屋の出店、運送店、タクシー屋の進出が目立ちます。そして、飯能座、春日館の劇場も出来ます。

以下これ等に就いて順を追って説明させていただきましょう。

材木屋の出店は飯能の特殊事情がございます。御承知の通り飯能は江戸時代から西川材の産地でございまして、江戸時代から大正にかけて、名栗、原市場から伐り出した材木を筏に組んで飯能へ、そして更に入間川、川越を経て東京の千住へと流送しておりました。しかし、飯能から千住までの筏流しは、順調にいっても五日間、天候が悪いと十日もかかったといわれ、しかも通過する川筋では水利その他の関係でトラブルが絶えず困難がともなったのであります。それが鉄道を利用すれば、飯能から池袋まで、わずか二時間ですから、こんな便利なことはございません。名栗方面からの筏は河原町で陸上げされ駅前に運ばれました。そして一方、大正の頃になりますと、馬や、牛の荷車で、材木が運ばれるようになりましたから、名栗、原市場のみならず、吾野、高麗、成木方面からも材木が牛馬の荷車で飯能へ入って参りました。飯能の材木屋はそれを東京方面へ売り捌いたのですが、それには駅前に店を構えるのが一番よかったのであります。出来ることなら、直ぐ貨車積みが可能な場所ということで、今の第一勧業銀行の角から線路に沿って春日通りまでの所が、まず材木屋の店で埋ったのであります。


貯木場（大正中期）

その状況は私の調べたところでは概ね次の通りであります。

まず、第一勧銀のところから西へ順に申し上げますと、

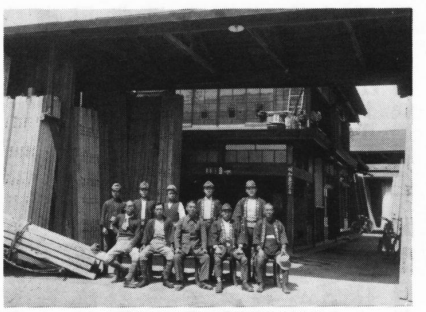
㊎山一材木店　山崎　市蔵
　大正十四年頃出店
㊐加藤材木店　加藤　義市
　大正十一年
㊍松啓材木店　和田啓次郎
　大正八年
㊏佐野材木店　佐野　市蔵
　大正六年頃
㊌仲好商店　中村仲次郎
　大正十四年
㊋浅見材木店　浅見保太郎
　大正十二年
㊍新井製材部　新井　伝吉
　大正八年頃
㊍武居商店　武居　藤吉
　昭和六年
㊍井上材木店　井上　儀八
　大正十二年
㊇丸町材木店　築地健次郎
　大正十一年

そして、この道路の一本北側の道路（コーヒー苑から松音屋菓子屋へ通ずる道）沿にも

㊍武居商店　武居　藤吉
　大正十一年頃出店
　（昭和六年前記へ移転）
㊓小林材木店　小林　貞治
　大正九年
　（昭和十一年久下稲荷東、線路南に進出。戦後は飯能木材株式会社）が店を出しました。

又、駅前正面の本通りにも、現在の柳屋菓子店、加藤衣料店のところに

　関根材木店　関根　三郎
　大正四～五年出店
　駅前角地、現在の本屋、むさし果実店のところに
㊌町田材木店　町田卯之助


加藤材木店（昭和17年）

松啓材木店

昭和十年頃出店
そして一軒おいてその北に
大河原材木店　店主不明
大正十年頃出店
大河原材木店の跡地には
㊎浅見材木店　浅見　修夫
昭和八年
丸広百貨店のところには
平沼材木店
（昭和四～五年頃）
が製材所と事務所を構えました。

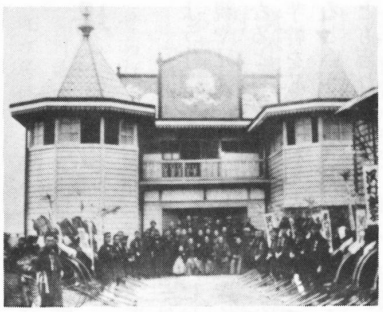
そして、昭和十年頃になるとこの外に武居売場、比留間材木店、㊍町田材木店、木村材木店安藤材木店が駅周辺の一丁目区内に開店し、飯能駅前は全く材木屋で占められたのでございます。特に第一勧銀から消防署への沿道は、道路南の駅構内まで材木の山でした。そして、昭和八年には今のプリンスホテルのところに材木組合の二階建の立派な事務所が出来、正に東京の木場のごとく、材木の街と化したのであります。これにより東京方面から材木を買いに沢山の客が飯能を訪れ、西川材の名声がいやが上にも高まり、大変繁昌致したのでございます。

材木屋の出店と平行して、飲食店では、港屋支店（開通と同時）、島田うどん（開通と同時）が出店、菓子屋では石川豊泉堂（大正十二年）、鈴木屋支店（大正十二年頃）、富士屋（昭和の初め）、タクシー屋では、市川自動車（大正十五年）、小沢自動車（昭和の初め）、田島タクシー、寺本タクシーが開業し、増島徳先生は大正九年に飯能病院を現在地に開業。又、その斜め南には小林節三さんが柳原境に接し、大正五年頃撚糸工場を建てられました。

材木組合事務所（昭和８年）

その一方では、大正の初めより大野ミシン屋の東にいた㊍織物の中里さんは、駅前ではこれ以上発展しずらいということで大正十二年頃に川寺の今の飯能光機のところへ大工場を建て、移転しました。そのため、矢川橋のところまで一丁目が拡がったのであります。

武蔵野鉄道が開通し、便利になったので、東京の文化が直に飯能に入って参りました。娯楽機関として、飯能座が大正五年に今の武居ビルの第一ホテルのところに出来ました。回り舞台付の立派な本格的劇場で市民に親しまれましたが、昭和十七年取りこわされました。又、映画館の春日館（飯能松竹）も大正十四年に現在地に建てられ、つい最近まで、長い間娯楽の殿堂として我々を楽しませてくれました。


飯能座（大正５年）

飯能駅前，婦人会の人たち（昭和初期）

このようにして大正末から昭和初期の飯能駅前は賑わい、繁栄致しましたが、これはとりもなおさず一丁目の繁栄発展でありました。

大通り商店街の力に、材木屋を中心とする駅前の人々の力が加わり、一丁目は大きく発展したといえましょう。一丁目町内のレクリエーション、コミニケーションの場である久下稲荷神社の改築、一丁目クラブの新築は、駅前の人達により提唱され、大通りの旦那衆がそれに動かされて、大正十二年、昭和三年にそれぞれ出来上ったのであります。又、大正十五年諏訪八幡神社の神楽殿新築並びに境内の整備に当っては、飯能駅前人の寄附が目立ちます。

駅が出来たことにより、一丁目は東に広がり、駅前が繁栄することにより、更に川寺境まで伸び、大町内に成長拡大発展した過程がおわかりいただけたことと思いますが、その中で材木屋の存在を見逃すことは出来ないと思います。

久下稲荷神社

戦後、再び駅前の材木屋は活況を呈しますが、トラック輸送の進展、駅周辺の商店街化、それに材木の大量生産、大量販売化により、駅前では場所が狭くなり他へ移転することになるのでございます。丸広が出来、第一勧業銀行が出店し、武居ビルが出来、昨年は十一階建の駅ビルが完成しました。

駅前は、これから益々変って行くでありましょう。大正時代のわずか七～八十年前のことが忘れられ、分からなくなりつつあります。今のうち知っていることを書いて置くことが大切と思い駄文をかえりみず書かせて頂きました。何か参考になれば幸いです。

トラックにての出荷

★掲載の写真は加藤氏所蔵のものですが、一部「写真集・飯能」「いかだみち・二の木会」より引用いたしました。ご協力ありがとうございます。

ずいひつ

とうかんや

相場雪枝

十月のある日、友人と連れだって巾着田にマンジュシャゲの花見に行き、その帰りに「高麗郷土民俗資料館」に立ち寄る。

玄関を入ると真っ正面に「とうかんや」に使う藁鉄砲が二本展示してあった。私は思わず「あらっ」とつぶやきながら駆けより、その前にしゃがみこむ。藁鉄砲と五〇年ぶりの再会である。珍しい人と久し振りに出あった時の喜びにも似たおもいで藁鉄砲を見つめていた。

幼い日「とうかんや」の行事に加わって育ってきた私は、当時のさまざまな風景が次々と思いだされて郷愁をおぼえた。

「とうかんや」は子どもが主役の行事である。私の子どもの頃は農村の年中行事の一つとして近在の村々で盛んに行われた。

十月十日の夕方、となり組の子どもたちが藁鉄砲を持って集まる。年長の子どもの指図に従いながら隣りの家から隣りの家へと回って行き、その家の庭先にならんで

とうかんや　とうかんや
だいこも　ぬけだせ
なっぱも　ほきろ
とうかんや　とうかんや
いのこのぼたもち
なまでもいい

と唱和しながら藁鉄砲で地面を打つ、一連の歌の中で八回打つのがきまり。みんなの気が揃うと歌う声と叩く音が一致する。子どもごころにも調子よくできたときは喜んだものである。

「とうかんや」が回ってくると、家の人が「ごくろうさん」と庭にでてきて、ぼたもちをくれる家もあれば、鉄砲玉をくれる家もあり、このもらい物が子どもにとって楽しみの一つであったといえよう。

藁鉄砲で良い音をだすのはむずかしいものである。足のふんばり加減、腰の曲げ具合、腕力のあるなし等々。そして何よりも藁鉄砲の作り方に左右されると聞いている。長さや太さ、縄の巻き方など工夫し見栄えもよく良い音のでるよう作ったもので、幼い時には親や兄姉が作ってくれ、大きくなると自分で作る子どももいた。芋幹を芯に入れると良い音がでるというので真似して作ったことも忘れられない。

母親たちは、十月九日の夕飯に「いのこのぼたもち」、十日には手打ちうどんを作って神棚にお供えする。どちらも当時の食事としてご馳走だったので、家中の人がこれを頂くのを楽しみに待っていた。

この「とうかんや」の行事も私の郷里では昭和三〇年頃から中やすみしているそうだ。子どもの数が少ないのが原因らしい。

各家庭では従来通り「いのこのぼたもち」を作り、うどんを打って神に供え、豊作を祈り感謝する風習は続けられていると聞き、私はこのことを嬉しく思う。

最近、絵本で「いのこのまつり」という昔ばなしを読み面白さに心をひかれた、「いのこのまつり」のあらすじは、

『ある年の秋、作べえという年より夫婦が、広い大根畑の手入れをしていた。そこへ、いつも村の畑を荒す一匹の大きな猪がでてきて「きょうは、いたずらにきたのではない。畑仕事の手伝いにきた。ちゃんとできたら娘を嫁にくれろ」と。作べえは猪の言い分を呑み、手伝ってもらう。夫婦でやると三日も四日もかかる土よせを一日で済ませた。作べえは猪に三日後の朝、娘をくれる約束をする。

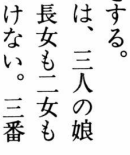
家に帰り作べえは、三人の娘に猪の話をした。長女も二女も「いやだ」と受けつけない。三番目の娘は年をとった両親の困りきっている顔を見て「私が行きます」と明るい声で承知する。

やがて約束の日がきた。猪は朝早く迎えにくる。娘は父親の耳もとで「心配しないで、すぐかえってくるから」といい、猪に「私の寝床にしくのよ」と新しい藁を一束いのししの背中にくくりつけ、自分はその上に乗って家を後にした。峠の上にくると娘は火打ち石で藁に火をつけ、燃えあがるのを見て飛びおりる。猪はボーボー燃えさかる火の熱さに全速力で走りだし崖の上から深い谷底に落ちて死んだ。娘は無事に家にもどり皆おおよろこび……。

ところが、村に異変が起きてきた。取り入れ前の作物が枯れてしまう。次の年も秋の収穫期になると、今まで青々としていた作物が一本残らず枯れてしまった。困った村人たちは占い師を呼んで占ってもらう。「これは殺された猪が怒ってわるさをしているのじゃ。祭りをしてなぐさめてやるのがよい」と。

猪の死んだ日は十月十日。村の人たちはこの日、畑のまん中に祭檀を設け猪の形をした餅をたくさん作って供え祈とうした。すると翌年から畑の作物が枯れなくなり、秋にはたくさんのおいしい野菜がとれるようになった。』

という話。



「いのこ祭り」は近畿以西の呼び名。関東では「十日夜（とうかんや）」と呼ぶ。田畑の収穫を祝う祭りで、取り入れ前の作物を荒らす猪やモグラを追い払い豊作を祈念する行事である。

私が不可解にしていた「いのこのぼたもち」の由来も、昔話によって納得した。飯能でも「とうかんや」を戦前までは盛んに行なった地域もあったが、現在はほとんど見かけないと聞く。

私は、子どもの行事である「とうかんや」が消え失せてしまうのは残念に思う。

カット　岡野達雄

新井清壽先生を偲んで

平成四年十月十六日、突然新井先生の訃報に接し、私は驚きとともに、ポッカリと大きな穴があいたのを感じた。やゝ時を経てもその空洞はふさがらなかった。

飯能の郷土史に係る者に、かけがえのない先生であるばかりでなく、数多の役職で指導され、実践された先生でもあった。だから、大きな存在を失った後に残る空白感は、埋めることのできない空しさであった。

幅広い先生の造詣の中でも、古文書の調査と研究は、とくに大きな足跡の一つであろう。またその解読の指導、考証解説は、後継ぎを養成したばかりでなく、多くの市民に郷土史を知らせ、親しませるきっかけとなった。いま郷土史研の多くは、先生の講義に導かれて、歴史への親しみをもったと思われる。しかも、これらのご指導は、長い教職生活を終えられた昭和四十六年以降のことだから驚きである。

資料調査の姿勢についても、いくつもの思い出がある。先生は、史実に忠実であることをくりかえし教えられた。ご自身もそれを貫かれた。――それは市史編さんが始まった頃、委員会で「市民に親しまれるよう資料編は横書きに……」と提案がなされたら、先生は真向から反対して「どこに横書きの資料があったか」と怒られ、ご自身の執筆はタテ書きで通された。

先生はお若い頃から、時折教え子に雷を落されたという。それが郷土史研でも折ふし蘇り、私達も、その雷鳴に時折縮みあがったことがある。しかし大層はにかみやで、著書の出版祝いや、叙勲の祝い等では眼鏡の奥の眼を細めて、テレかくしの笑いでゴマ化しておられたのを、何度も見たことがある。

飯能郷土史研には創立以来の重鎮として、会ではうん蓄を傾けておられた。昭和五十八年からは会長として、会の基礎をお造りいただいた。

今となっては先生を偲び、ご冥福を祈りながら会の活動をお誓いし、今後もお見守り下さることを冀うばかりである。

井上峰次

◆写真は白鳥幼稚園園長時代、卒園式にて。（昭60）先生は幼児教育にも大変力を注いでおられました。

吉良先生を悼む

多くの教えをありがとうございました。

笹本敏様（先生のご長女）ご夫妻が、先生を両側から支えられて郷土館へお出でになったのが、ついこの間のような気がします。あれから二年近くも経ち、昨年十二月に慈父のような温顔の先生とおわかれしてからでも半年が過ぎてしまいました。まことに歳月の移り変わりの早さを感じるこのごろです。

先生は昭和のはじめに飯能へ来られたそうですが、以来この地を愛し、この地の歴史とともに歩んで来られて生涯を終えられました。

本職の歯科診療のほかに「吉良蘇月」という号の俳句の実作者でもあり、その著作の題名も「名栗川」「山毛欅峠」「天覧山」と、この地の名称をおつけになりました。これも飯能を愛されていたからでありましょう。

また、先生がこの飯能に遺されたものは数多く、いまでもいろいろなところで、その恩恵に浴しております。学校医として子ども達の健康維持に、保護司として犯罪の撲滅に、しかし、何といっても、文化都市「飯能」を萌え立たせた揺籃期の、先生の業績はまことに大きなものであります。

太平洋戦争後、食糧も紙も、あらゆる物資が不足し、精神も荒廃していた時代にあって、ご自分の家を開放して文芸誌「飯能文化」の編集所としました。

そこで詩人の蔵原伸二郎を中心として、小川文夫、野口家嗣吉良憲夫の四氏が編集に当たりました。まさに飯能文化の黎明といえましょう。「飯能文化」に原稿を寄せた人達の中には、一流の文化人もおり、棟方志功下村湖人、水原秋桜子、石田波郷、長谷川かな女など錚々たる人の名もみえます。先生の交遊の幅の広さが想像されます。

これらの作品や原稿類は、先生のご好意とご意志により、先年郷土館でお預りいたしました。平成二年には企画展に使わせていただきましたが、これからも大切に保管し、お名前とともに後世にお伝えすることをお約束いたします。

先生の御霊安からんことをお祈りして筆を擱きます。

郷土館　浅見

◆写真は、諏訪八幡神社にある句碑。

平成四年度の活動

◎四月例会（4/18）
飯能市街地歴史散歩
＊諏訪神社縁起……柳川真一氏
＊入子地蔵尊……入子昌雄氏
＊市街地歴史探訪…加藤義雄氏
浅見恭二氏

飯能恵比寿神社前にて

◎六月例会（総会 6/13）
記念講演「秩父の人生儀礼について」
講師　県立歴史資料館
館長　栃原嗣雄氏

◆郷土はんのう 第十二号発行

◎十月例会（11/1）
バスツアー　八王子歴史散歩
講師　青木晃平氏
八王子城跡、相関寺、下原鍛冶跡、八王子車人形、八王子郷土資料館、等々。

◎十二月例会（12/11）
事後学習会
講師　山影康洋氏
青木晃平氏

八王子城跡にて

◎二月例会（2/21）
飯能駅前通りにみる一丁目の繁栄
講師　加藤義雄氏

平成五年度 活動予定

●四月例会（友の会と共催）
飯能の商人魂
講師　小川郁次郎氏

●六月例会（総会）
記念講演
伝説・記録・遺跡
歴史の調べ方
講師　県立博物館副館長
吉川國男氏

「郷土はんのう」第十三号発行

●十月例会
県外バスツアー（歴史散歩）

●十二月例会
事後学習会

●二月例会
地場産業シリーズ
「飯能の和紙」

新入会員紹介

木村　弘（東町一一一三）
中里吉平（大河原五七二）
冨田直美（飯能二八二一八）
田部貞雄（双柳五九四一五）
山口芳子（柳町五一七）
小山政之助（山手町四一十四）
滝　静子（白子二八八）
小林房吉（笠縫二一七一二）
中村順子（白子三二三）
宮沢政雄（南町七一八B一五〇三）
山影康洋（矢颪二二二）

連日にぎわっている郷土館での飯能の広告展

郷土館の催物・行事予定

▼市制四十周年記念
飯能の広告展
4/20～6/20

▼ミニ教科書展
7/1～7/25

▼出土品展
8/1～8/31

▼拓本展
10/15～12/16

なお、来年度は民俗芸能、漢方医に関する特展を企画しております。

郷土館では多彩な催物を企画しております。ぜひ皆様ご家族お揃いでお出かけいただければ幸いです。

高萩市の皆さんとの歴史交流会にて

編集後記

十三号を手にとって、ハッとしたでしょう。表紙がカラーになったのです。カメラマンはもちろん、井上会長です。

また今回は力作ぞろいでした。〝郷土はんのう〟には、皆様の日頃の活動、研究論文等積極的に載せていきたいと思っておりますが、ご意見・原稿等がございましたらお寄せ下さい。

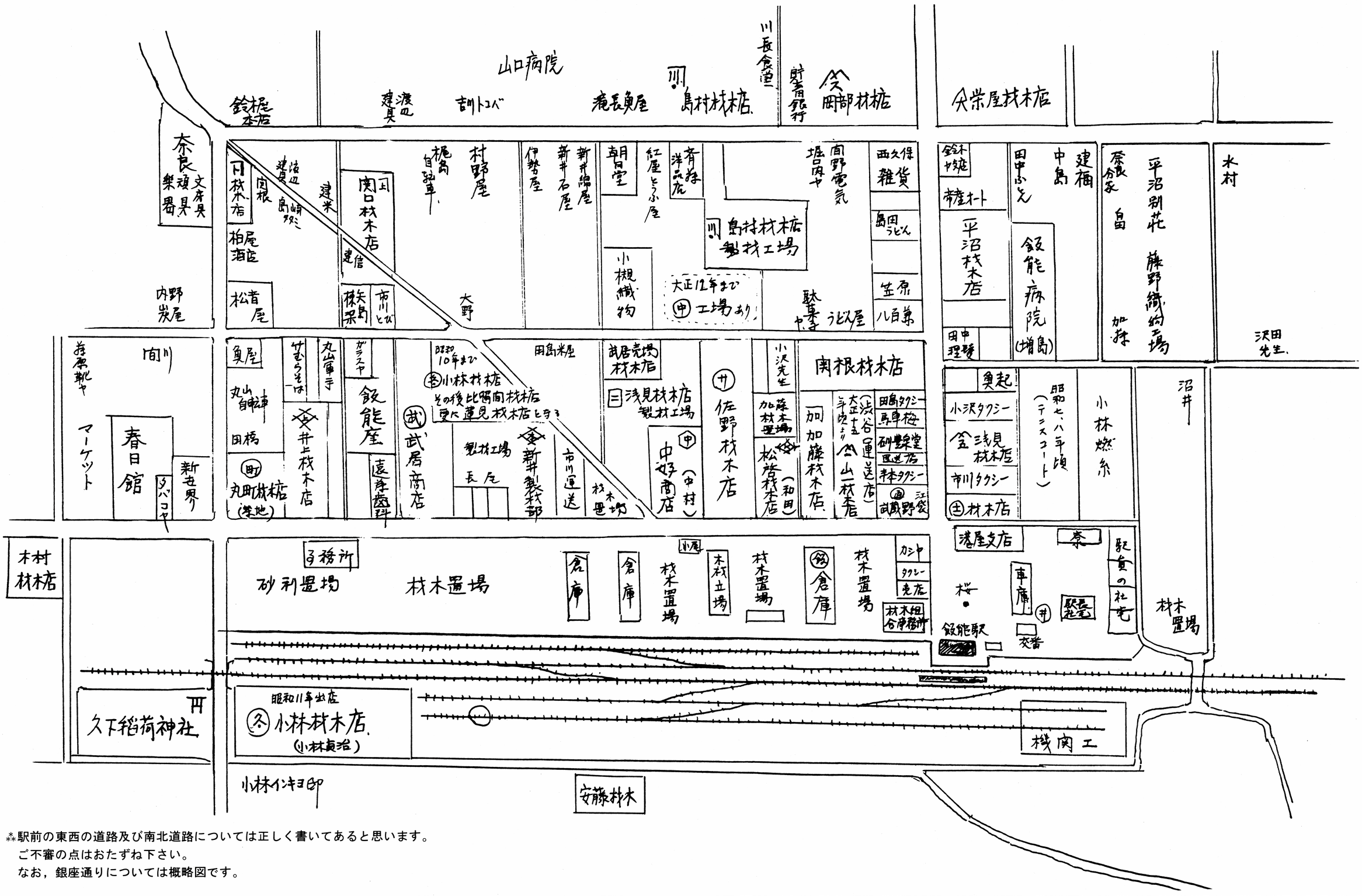
智観寺に眠る中山氏とゆかりのある茨城県高萩市より、西野さんの所に、歴史交流会の申し出がありました。井上会長外十名、一泊で高萩市を訪れましたが、市長以下中山家臣団の暖かい歓迎に、一同心を熱くしました。中山氏につながる赤い糸が歴史を育てていくのですね。

（桑山）

郷土はんのう　第十三号
発行日　平成五年六月十二日
発行所　飯能郷土史研究会
飯能市飯能二五八一一
飯能市郷土館内
〒三五七一〇四二九一七二一一四一四
印刷所　コバヤシ印刷
題字　小谷野寛一
表紙写真　井上峰次
写真説明　坂口和子

昭和11～12年頃の飯能駅前

制作：加藤義雄　　1993. 6. 10.



⁂駅前の東西の道路及び南北道路については正しく書いてあると思います。
ご不審の点はおたずね下さい。
なお，銀座通りについては概略図です。